第一章：紫影揺らめく湯けむりの前

静寂。

日常の喧騒、あるいはカルデアでの殺伐とした任務から切り離されたその場所は、ただ静けさだけが支配する山間の隠れ家だった。

高級旅館『紫水（しすい）』。

誰にも邪魔されず、二人きりの時間を過ごしたいという願いを叶えるために用意された、極上の空間。

廊下に敷かれた畳の感触を足裏に感じながら、俺は前を歩く彼女の背中を見つめていた。流れるような黒髪。白磁を思わせるうなじ。歩くたびにふわりと揺れる、品の良い桔梗色の着物。

源頼光。

平安最強の神秘殺しにして、俺の契約サーヴァント。そして――自らを「母」と称し、俺を溺愛してやまない狂愛のバーサーカー。

「……ふふ」

彼女が立ち止まり、吐息のような笑い声を漏らす。

客室の襖の前。流れるような所作で振り返ったその瞳には、すでに俺しか映っていない。

「着きましたよ。ここが、母と……愛しい愛しい子供だけの、誰にも邪魔されないお城です」

襖が開かれる。純和風の広々とした室内。い草の香りが鼻腔をくすぐる。

「さあ、早く中へ。……外は危険がいっぱいですから。悪い虫がつかないよう、早く母の目の届くところへ」

ふわりと、茎の香りがする袖に包み込まれ、部屋の中へと招き入れられる。

襖が閉まる音は、外界との断絶の合図。

ここからは、彼女――頼光ママとの、密室劇が始まる。

―――――

荷物を置くや否や、俺は畳の上で捕獲された。
正確には、彼女の豊満すぎる胸の中に、抱きすくめられていた。

「ああ……やっと、やっと二人きりになれましたね。ずっと、こうして抱きしめたかった」

耳元で囁かれる甘い声。
視界は彼女の紫の着物と、圧倒的な質量を誇る胸部装甲によって完全に遮断されている。
柔らかい。そして、甘い匂いがする。

「疲れたでしょう？　レイシフトの疲れ、日頃のストレス……全部、母が吸い取ってあげますからね。さあ、力を抜いて……」

ぎゅううう、と抱擁の力が強まる。

甘えていると解釈したらしい彼女は、俺の頭を優しく、しかし執拗に撫で回した。

「よしよし、よしよし……。そんなに擦り寄って……甘えん坊さんですねぇ。可愛い、本当に可愛い……」

押し付けられている胸の感触は、どう考えても健全な親子のそれではない。心臓の鼓動が、俺の鼓動と重なっていく。

「……ん？」

ふと、彼女が動きを止め、俺の顔を覗き込む。長い睫毛に縁取られた瞳が、心配そうに揺れていた。

「顔が赤いですね。……もしかして、熱でも？　それとも、母の愛が強すぎましたか？」

無自覚。この状況で顔を赤くしない男がいるなら、それは石像か何かだ。

「ふふ、照れているのですね。……愛らしい」

彼女は嬉しそうに目を細めると、俺の頬にそっと手を添えた。

「温泉に行く前に……少し、休みましょうか。お茶を淹れますね。母が淹れるお茶は、格別ですよ」

ーーーーーー

お茶請けの羊羹を「あーん」で食べさせられるイベント（拒否権なし）を経て、時刻は夕暮れ時。

「……さて。汗を流しましょうか」

頼光さんが立ち上がると、当然のように俺の服に手を伸ばしてきた。

「さあ、万歳してください」

必死の抵抗（アイコンタクトと首振り）を試みるも、彼女はきょとんとした顔をするだけだ。

「どうしたのです？　……ああ、恥ずかしがっているのですね。もう、今さら何を恥じらうことがあるのですか。母の前で」

結局、俺はなされるがままに浴衣へと着替えさせられた。

「うん……よく似合います。さすがは、母が見込んだだけはある」

次は彼女の番だ。彼女は俺に背を向けることもなく、その場でするりと帯に手をかけた。

「……どこを見ているのです？　ちゃんと、見ていてください。母の全てを」

衣擦れの音が、静寂な部屋に響く。

紫の着物が畳に落ち、露わになるのは、神代の血を引く者特有の、人間離れした美しさを持つ肢体。

だが、俺の視線がその胸元に吸い寄せられた瞬間、彼女の頬がほんのりと朱に染まった。

「……あ」

さっきまでの堂々とした態度はどこへやら。急に「女性」としての羞恥心が顔を出したらしい。

「そ、そんなに……じっと見つめられると……その、母も少し、恥ずかしい……です」

「うぅ……い、急いで着替えますねっ」

彼女は慌てて浴衣を手に取るが、胸囲が合わない。

「……入り、ません」

浴衣の前が閉まらない。合わせようとすると、胸の谷間が強調され、むしろ扇情的な光景が生まれてしまう。

「こ、困りましたね……。これでは、はだけてしまって……手伝って、もらえますか？」

俺がおずおずと手を伸ばし、彼女の帯を締め直そうとする。指先が肌に触れるたび、彼女の口から小さな吐息が漏れる。

「んっ……ふふ……くすぐったいです。でも……嬉しい」

なんとか着付けを終えたものの、白く深い谷間は堂々と主張していた。

「さあ、行きましょうか。温泉へ」

彼女が俺の手を取る。その手は熱かった。

「背中……流してあげますからね？　隅々まで……たっぷりと、可愛がってあげます」

夜は、まだ始まったばかりだ。

第二章：白濁の湯、母の愛に溺れる刻（とき）

ガラス戸を開けると、むせ返るような湯気とともに、硫黄の香りが鼻腔を満たした。
先に入っていた彼女が、湯船の中から手招きをしている。

「……お待ちしておりましたよ」

乳白色の湯面から、隠しきれない二つの巨大な果実が、半分以上も浮き上がっていた。

「さあ、こちらへ。お湯加減、ちょうど良いですよ」

俺は喉をごくりと鳴らし、湯船へと足を踏み入れる。
彼女は蕩けるような笑みを浮かべ、ずずい、と距離を詰めてきた。
濡れた肌同士が触れ合う感触は、とてつもなく滑らかで、熱い。

「……ふぅ。良いお湯ですね。こうして二人きりで浸かっていると、世界の全てがどうでもよくなってしまいます」

腕が、彼女の豊かな胸の側面に押し付けられている。
彼女は俺の視線が胸元を彷徨っていることに気づくと、隠すどころか、さらに胸を張って見せつけてきた。

「……見ていますね？」

耳元で囁かれる甘い声。

彼女は俺の手を取り、自分の胸へと導く。

「ふふ、いいんですよ。母の体は、この子のためにあるのですから。……どうですか？　今日の母の胸は」

彼女は自分の胸を、まるで極上の献上品のように誇らしげに見下ろしている。

「母もね、自分のこの胸が……とても気に入っているのです」

「だって……この子が、好きでしょう？　大きいのが」

ずきゅん、と心臓が跳ねる。

「この子が喜んでくれるから。この子がこの胸に顔を埋めて、安らいでくれるから。……だから母は、この胸が大きければ大きいほど、嬉しいのです。ああ、この溢れんばかりの肉

は、全て愛し子を甘やかすためにあるのだと……そう思うと、胸の奥が熱くなるのです」

彼女は恍惚とした表情で、自分の豊かな双丘を両手で持ち上げた。

ぷるん、と凄まじい弾力で肉が揺れる。

「見てください。こんなにたっぷりと……愛し子を受け止める準備ができていますよ？　……んっ、ぁ……」

自分で胸を寄せた刺激に、彼女自身が小さな喘ぎ声を漏らした。

ーーーーーー

「さて……約束通り、背中を流してあげますね」

彼女が立ち上がり、湯の中から現れる。

洗い場へ移動し、椅子に座らされる。

背後に、彼女の気配。スポンジやタオルの感触は来ない。

代わりに、背中に押し付けられたのは――圧倒的な、柔らかさだった。

「……んっ、ふぅ……」

彼女が、自分の胸で俺の背中を洗い始めたのだ。

石鹸の泡で滑りを良くしたその双丘が、俺の背骨に沿って、円を描くように蠢く。

「頼光、さん……っ！？」

「しっ……。じっとしていてください。母が、綺麗にしてあげているのですから」

背中に巨大な水風船を押し付けられ、ぐにぐにと押し潰されているようだ。

乳首の硬い突起が、背中の筋肉を擦過するたびに、電流のような刺激が走る。

「ああ……背中、広くなりましたね……。あんなに小さかったのに……。今では、母の胸を

受け止めて余りあるほど……んくっ、はぁ……っ」

彼女の呼吸が荒くなる。心臓の鼓動が、早鐘のように激しくなっていた。

「もっと……もっと綺麗にしてあげますね。……脇の下も、首筋も……母の全てを使って……」

ぬるり、と感触が移動する。

彼女は背後から俺の首に腕を回し、首筋に唇を触れ、甘噛みし、舌を這わせる。

「んっ、ちゅ……あぁ……いい匂い……。私の、私の子供……。食べてしまいたいくらい……愛おしい……」

理性のタガが外れかけている。

彼女の手が、俺の胸板を這い、腹筋をなぞり、さらに下へと伸びようとする。

「ら、頼光さん！　ここ、外だから！」

俺が慌てて制止すると、彼女はとろんとした瞳で俺を見つめ、不満そうに唇を尖らせた。

「……意地悪。母はただ……愛し子の全てを愛でたいだけなのに」

彼女は一旦手を止めたが、代わりに俺を正面から抱きしめる。
石鹸の泡にまみれた体同士が密着し、ヌルヌルと滑り合う。

「分かりました。……続きは、お部屋でしましょうか。お布団の中で……朝まで、たっぷりと」

夜は深い。
濡れた髪から滴る水滴が、彼女の白い背中を伝い、美しい曲線を描く尻へと吸い込まれていく。

第三章：甘露の接吻、母の聖域（サンクチュアリ）

部屋に戻るや否や、俺は敷かれたばかりの布団の上へと押し倒された。
紫色の影に覆い尽くされる。

「ああ、もう……もう、我慢できませんっ！」

頼光さんが、俺の上に覆いかぶさっている。
浴衣の帯は緩み、胸元は大きくはだけ、湯上がりの火照った肌が艶めいている。彼女の瞳は潤み、トロンと蕩けていた。

「さっきの……お風呂でのこと。この子も、感じてくれていましたよね？　母の愛を、全身で受け止めてくれていましたよね？」

彼女は俺の両手首を掴み、頭の上で固定する。抵抗など無意味だ。
顔が近い。彼女は熱っぽい吐息を漏らしながら囁き続ける。

「いい子。……本当にいい子。そんな熱い目で見つめられたら……母、どうにかなってしまいそうです。ううん、もうどうにかなってしまいたい……っ」

彼女の膝が、俺の太ももの間を割るように入り込んでくる。

そして、甘く切羽詰まったように告げた。

「ねえ……まずは、ご挨拶をしましょうか。お休み前の、甘い甘い……親愛の儀式を」

ーーーーーー

唇が触れる。最初は羽毛が触れるような、優しいキスだった。

ちゅ、と可愛らしい音が鳴る。

「ん……っ」

だが、それは合図に過ぎなかった。

彼女が小さく鼻を鳴らした瞬間、優しいキスは貪るような捕食へと変わる。

「はむっ……んぅ、ちゅ……っ、ぁ……」

唇が押し付けられ、形が変わるほどに吸い上げられる。
彼女の舌が、強引に、しかし焦がれるように俺の口内へと侵入してきた。
絡み合う舌先。彼女の喉奥から漏れる甘い鳴き声が、静かな部屋に響き渡る。

「んむ……っ、ぁ、ふぅ……っ、ちゅる……」

息ができない。彼女は息継ぎの隙間さえ与えてくれない。

「はぁ……っ、ん……おいしい……。この子の味……母を狂わせる、極上の蜜……っ」

一瞬だけ唇が離れ、銀色の糸が引く。
すぐに我慢できなくなったように再び唇を重ねてきた。

「もっと……もっとください。この子の息も、声も、唾液も……全部、母のもの……っ」

――――――

終わらない接吻の最中、拘束されていた俺の両手が解放された。

彼女が俺の手を取り、導いた先は――。

「んっ……ぁ……。ここも……この子を待っていますよ……？」

柔らかく、温かく、そして圧倒的な質量を誇る場所。彼女の胸だ。

彼女は俺の手を自分の胸に押し付け、懇願するように腰をくねらせた。

「触って……。母の、この溢れんばかりの想いを……手で、確かめて……っ」

俺の指が、白磁の肌に沈み込む。

信じられないほど柔らかい。

「あっ……！　んぅっ、はぁ……っ！」

少し力を込めて揉みしだくと、彼女はビクッと背中を反らせ、甲高い喘ぎ声を上げた。

「そう……そこ……っ。あぁ、いい……っ。この子の手……熱い……っ」

彼女は自分の手で俺の手を覆い、さらに深く、強く、胸へと押し付ける。

「もっと……もっと乱暴にしていいんですよ？　母は……この子になら、何をされても……んあっ、ぁぁ……っ！」

先端の突起を親指で弾くと、彼女の体から力が抜け、俺の上に崩れ落ちてきた。

「はぁ、はぁ……っ。ダメ……もう、頭がおかしくなりそう……。この子の手が、母を……

メスに変えてしまう……っ」

彼女は俺の首に腕を回し、泣きそうな声で訴える。

「……好き。大好き。愛しています……。ねえ、分かりますか？　この胸のときめきが。この、体中を駆け巡る熱が……っ」

「……続き。続きをしましょう……？」

頼光さんが、とろりと濁った瞳で俺を見下ろす。その手は、ゆっくりと俺の浴衣の帯へと伸びていた。

「もう……戻れませんよ？　母の愛という名の……底なし沼へ。さあ、堕ちてきなさい……私の、愛しい愛しい……坊や」

第四章：愛の根源、聖なる乳房を捧ぐ

頼光さんの手が、俺の浴衣の帯を解いた。
カサリ、と音を立てて帯が畳に落ちる。同時に、俺の浴衣は完全に開放された。

「……ふふ。全身で、母の愛を受け止めてくれるのですね。良い子……本当に、健気で愛しい子」

彼女の瞳は、純粋な愛の狂気に満ちていた。
熱い吐息が零れ続ける。

「はぁ、ぁ……っ。さあ、もう一度。今度は、もっと深く、全身で……。この子と母の間に、何もいらない」

彼女は再び唇を重ねてきた。
激しく、熱を帯びたキス。唇が、舌が、口の中の粘膜が、激しく吸い上げられる。

「んんぅっ……ちゅっ、ぁ、ふ……っ！　やだ……離さない……っ」

俺の全てを味わい尽くそうとするかのように。

――――――

彼女の口づけが、遂にその目的地へと辿り着く。豊満な双丘の、ちょうど谷間の部分。

「……見てください。この子の愛で、こんなに熱くなって……脈打っていますよ」

彼女は自慢するように、その巨大な胸を揺らした。

俺の顔を両手で包み込み、そのまま、白い聖域へと押し付ける。

「さあ……存分に愛でなさい。この子を育み、守るために、母が培ってきた……愛の根源を」

顔面が、柔らかな肉に埋もれる。

俺が唇を寄せる。柔らかな肌に、吸いつくようにキスを落とす。

「あっ……ん、んんぅ……っ！　ぁぁ……っ、ダメ……っ」

彼女の指が、俺の頭を優しく、しかし離さないように深く埋め込んできた。

そして、頂の突起へと届いた瞬間――。

「ひゃうっ……！　ぁ、あぁあああっ……っ！」

全身を貫くような、激しい喘ぎ声。

「な、なんてこと……！　この子は、本当に……母を、狂わせる天才ですね……っ。そんなに、舐められるなんて……っ」

俺の口元は、彼女の豊満な胸に押し付けられたまま、愛を貪り続ける。

吸う。舐める。愛撫する。

――――――

愛撫は続く。彼女は恍惚とした表情で、俺の頭を抱え込んだ。

「ふふ……いいんですよ。もっと、深く。もっと、強く……っ」

彼女は真面目な顔をして、俺に語りかける。

「聞いてください。……まだ幼い。戦場での疲労、カルデアでのストレス……。魂は、枯渇しています」

俺の頭を再び自分の胸元へと誘導する。

「さあ、この胸に。……母の体は、この子のためにあるのです。生命を育み、力を増すため

に……」

俺は促されるまま、愛を込めて、優しく吸いつくような口づけを繰り返す。

「あぁ……っ、んんぅっ……！　たまらない……っ。この子が、母の全てを吸い尽くしてくれる……っ」

彼女の喉からは、悲鳴にも似た、甘い喘ぎ声が零れ続ける。

「もっと……っ、もっと……っ。この子の飢えを、母が満たしてあげます……っ。全て、全て、この子のもの……っ。母の愛は、無限なのですから……っ」

濡れた瞳から、一筋の涙が零れた。

「……もう、限界。母も……この子なしでは生きられない……っ」

愛と支配、母性と情欲が完全に融合した、甘い夜が始まる。

第五章：紫焔の果て、永遠の母胎へ

ふかふかの布団が、熱を帯びた二人の体を優しく受け止める。

乱れた黒髪を枕に広げ、とろりと蕩けきった表情で見上げる頼光さんの姿。

「……来て。早く、母の深いところへ……」

彼女が両腕を伸ばし、俺の首に絡みつく。

身体を重ねると、彼女の豊満な胸が俺の胸板に押し付けられ、柔らかな弾力が全身を包み込んだ。

「んっ、ぁ……っ。この子の重み……心地いい……。ずっと、こうして……一つになりたかった……」

彼女の両脚が、俺の腰に絡みつく。
白い太ももが俺を逃がさないように締め付け、最も熱く、湿った場所へと誘っている。

「もう……待てません。この子を……この子の全てを、母の中に受け入れたい……っ」

彼女の手が、俺の昂りを導く。愛液で濡れた入り口が、俺の先端に触れた。

「……愛しています。私の、愛しい愛しい子供……」

その言葉を合図に、俺は腰を沈めた。

――――――

「あぁっ……！　んぐぅっ……、はぁあああっ……！」

結合の瞬間、彼女は背中を大きく反らし、悲鳴のような喘ぎ声を上げた。

信じられないほどの締め付けが、俺の侵入を決して逃がさないように絡みついてくる。

「入っ……た……。この子が……私の中に……っ。んくっ、ぁ、あぁ……っ！」

彼女の瞳孔が開き、快楽と衝撃で焦点が合わないまま、宙を彷徨う。

俺が動くたびに、内壁がうねり、吸いつき、蕩けるような快感を与えてくる。

「すごい……っ。奥まで……そんなに……っ。母の胎内（なか）を……かき回して……っ」

俺たちは何度も何度も唇を重ねた。キスをしながら腰を動かすたび、脳髄が痺れるような快感が背骨を駆け上がっていく。

「んんぅっ！　ちゅ、れろ……っ。はぁ、んっ！　すき……っ、もっと……もっと奥まで……っ！」

――――――

「あ、ダメ……っ。もう、おかしくなる……っ。気持ちよすぎて……頭が、真っ白に……っ」

彼女の表情が、快楽で崩れていく。

俺の背中に爪を立て、懇願するように腰を揺らす。

「出して……っ。この子の命を、熱いのを……っ！　母の中に、全部……っ！」

彼女の言葉が、俺の最後の理性を断ち切った。

俺は彼女を強く抱きしめ、最奥へと突き入れる。

「いく……っ、頼光さんっ、中に……！」

「はいっ……！　くださいっ、この子の全てを……母にっ……！！　イッて……！　一緒に……っ！」

ドクン、と俺の身体が跳ねる。熱い奔流が、彼女の最奥で解き放たれる。

「あぁあああああっーーーーーーっ！！」

絶叫と共に絶頂を迎えた彼女は、ビクビクと激しく痙攣しながら、全てを受け止めていた。

「んぅぅ……っ！　あぁ……っ、熱い……っ、また、こんなに……っ」

ーーーーーー

嵐のような時間が過ぎ去り、静寂が戻ってくる。

彼女は俺の上に覆いかぶさったまま、虚ろな瞳で天井を見つめていた。

「……はぁ……、はぁ……っ。……すごかった……ですね。あんなに、たくさん……」

彼女はふにゃりと破顔すると、俺の頬に優しくキスをした。

「気持ちよかった……。この子と一つになれて……熱を、お腹の中で感じられて……母、幸せすぎて……溶けてしまいそう」

彼女は俺と繋がったままの下腹部を、愛おしそうに撫でた。

「ふふ……まだ、繋がっていますね。証……しっかりと、母が受け止めましたからね」

「……もう、離れられませんよ？　こんなに深く、濃く……繋がってしまったのですから」

彼女は俺の首に腕を回し、耳元で囁く。

「この子は一生、母の子供。そして……母だけの、愛しい男性（ひと）。……ずっと、ずっと……可愛がってあげますからね」

エピローグ：朝焼けの微睡み、終わらない愛の揺

雀のさえずりと、障子越しに差し込む柔らかな陽光。
重い瞼を持ち上げると、そこには圧倒的な「白」と「紫」の光景が広がっていた。

「……あら。おはようございます、愛しい坊や」

目の前で、頼光さんが慈愛に満ちた瞳で俺をじっと見つめていた。
乱れた黒髪、はだけた浴衣、そして昨晩の情事の残り香を纏った甘い匂い。

「ふふ……よく眠っていましたね。あまりに無防備で、可愛らしい寝顔だったので……母、ずっと見惚れてしまいました」

彼女がくすりと笑い、俺の頬を指先でなぞる。
俺の体の上には、彼女の滑らかな太ももが乗っていた。下半身は、温かく、湿った何か柔らかいものに包まれている。

「……ん？　どうしました？　顔が赤いですよ」

朝特有の生理現象で俺の身体が元気になっていることを、彼女は知っている。

「まぁ……。元気な子。昨晩あんなに、母に注ぎ込んでくれたのに……まだ、足りないのですか？」

彼女の声色が、朝の挨拶から夜の誘惑へと変わる。

逃げようとする俺の肩を、彼女は優しく、しかし絶対的な力で押さえつけた。

「ダメですよ、起きようとしては。……母が、鎮めてあげますから」

彼女は身体を起こし、俺の上に跨った。

――――――

「ん……っ、しょ……っと」

ぬちゅ、と卑猥な水音が響く。

彼女が腰を沈める。何の準備もなしに？　いや、彼女の中はまだとろとろに濡れていたのだ。

「あぁ……っ、入っ……ちゃいました……。朝から……こんなに硬くして……っ」

彼女は天井を仰ぎ、熱い吐息を漏らす。

結合部から伝わる熱。締め付け。内壁は俺を受け入れた瞬間から、嬉々として脈打っている。

「はぁ、んっ……！　すご……っ。奥まで……一気に……っ！」

彼女がゆっくりと腰を揺らし始める。豊満すぎる胸がたぷん、たぷんと重々しく揺れる。

「見て……ください。この子と母が……朝の光の中で、繋がっているところ……っ」

彼女は自分の胸を両手で捧げ持ち、その隙間から結合部を見せつけてくる。

「んんぅっ……！　あ、いいっ……！　そこ……っ、こすれる……っ！」

動きが次第に激しくなる。彼女は俺の胸に手をつき、乗馬のように激しく腰を打ち付ける。

「あぁっ、はぁっ、んあぁっ！　好きっ、この子っ、すきぃっ……！」

「母の……お腹の奥……っ、この子で、いっぱい……っ！　朝ご飯の前に……母を、食べて……っ！　全部で、満たしてぇっ……！」

彼女の理性が再び消し飛ぶ。グチュグチュと激しい水音を立てながら、俺の精気を搾り取ろうと腰を振るい続ける。

ーーーーーー

「いくっ……！　頼光さん、また……っ！」
「はいっ！　いいですよっ、出してっ！　朝一番の……濃いのを、母にっ……！！」

俺が腰を跳ね上げると同時に、彼女もまた、俺を限界まで飲み込もうと腰を落とした。

「あぁあああああっーーーーーーっ！！！」

二人の絶叫が重なる。
彼女は俺にしがみつき、ビクビクと激しく痙攣しながら、その全てを受け止めていた。

「んぅう……っ！　あぁ……っ、熱い……っ、また、こんなに……っ♡」

絶頂の余韻。

彼女は力の抜けた体で俺に覆いかぶさり、何度も何度もキスを降らせてくる。

「はぁ……、はぁ……っ。……おはようの、キス……。とろとろで、甘いですね……」

彼女はとろんとした瞳で微笑むと、俺の耳元で囁いた。

「……もう、帰りたくないですね。カルデアに戻っても……夜は、ずっと母の部屋にいらっしゃい？　……いえ、拒否権はありませんよ？」

彼女の腕が、さらに強く俺を抱きしめる。

「この子はもう、身も心も……その命に至るまで、母の一部なのですから」

朝日の中で、彼女の笑顔は輝いていた。

その腕の中の心地よさに、俺はもう二度と抗うことはできないだろう。

源氏の母の愛。
その深淵なる温泉宿から、俺が抜け出せる日は、きっと永遠に来ないのだ。

（完）